

博士学位論文審査要旨

2014年7月16日

論文題目：ソーシャルワークの「日本モデル」研究
－日本人の生活と文化に根ざした「生活場モデル」の構築－

学位申請者： 空閑 浩人

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 黒木 保博

副査： 社会学研究科 教授 上野谷 加代子

副査： 同志社大学 名誉教授 岡本 民夫

要旨：

本論文は、その国や地域に住む人々の生活に根ざした取り組みの一環となるソーシャルワークの理論と実践の「日本モデル」研究を目的としている。ここでのソーシャルワークの「日本モデル」とは、日本人の生活や文化に根ざした生活支援の実践とその実践を担うソーシャルワーカーの経験を大切にした、日本流のソーシャルワークのあり方を示すものである。それは現在の日本社会の中で、様々な生きづらさや生活のしづらさを抱える人々に対する確かな生活支援としてのソーシャルワークを支える「知」の創造を目指している。

本論文の課題と構成は、第1には、ソーシャルワークの「日本モデル」の必要性とその構築に向けた課題について論じている。第2には「社会福祉援助」としてのソーシャルワークの基盤となる人間観、生活観、援助観について論じている。この中でソーシャルワークにおける「かかわり」の意味や生活とその主体である個人への視点に関して論じている。第3には、日本人の生活・文化と「生活場モデル」の構想をしている。「場の文化」とされる日本人の文化に根ざしたソーシャルワークのあり方を「生活場モデル」(Life Field Model)として提示している。第4には、医療現場や高齢者福祉施設で働くソーシャルワーカーによって言語化されたアプローチを検証し、日本人の生活と文化へのまなざしと、日本人が行動主体や生活主体として成立する「場」の視点から、日本のソーシャルワーカーが利用者とともに協働で見出す「日本モデル」としての「生活場モデル」を展開している。最後に、ソーシャルワークの「日本モデル」とは、日本で暮らす人々への確かな生活支援を可能とする理論と実践のあり方として、日本社会と日本人の生活に眼差しを据え、ソーシャルワーカーの実践経験の言語化を通して、その発展と成熟を目指していくものとの結論を導き出している。

本論文は、日本におけるソーシャルワーク研究の中で、専門性や実践力の向上をめざした理論と実践の「日本モデル」の必要性に独自の意欲的に取り組み、「生活場モデル」を展開したことは今後の研究深化に大きく寄与するものであり、優れた論考として高く評価することができる。

よって、本論文は、博士(社会福祉学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2014年7月16日

論文題目：ソーシャルワークの「日本モデル」研究
—日本人の生活と文化に根ざした「生活場モデル」の構築—

学位申請者： 空閑 浩人

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 黒木 保博

副査： 社会学研究科 教授 上野谷 加代子

副査： 同志社大学 名誉教授 岡本 民夫

要 旨：

2014年7月15日（火）15時から1時間30分にわたり、申請者による公開学術講演会を溪水館1階会議室にて行った。その後、上記の審査委員による口頭試問を約1時間に渡って行った。公開学術講演会においては、申請者は研究の目的、課題そして研究成果について述べた後、出席者から出された質問に対して、的確な回答をすることによって本論文の学術的価値を明らかにした。また口頭試問においては、審査委員からの論文内容質疑に対して十分な応答をした。これらのことから、社会福祉学に関する高い見識と研究能力を有していることを証明した。

公開学術講演会の前に実施した外国語能力試験において、研究に必要な外国語（英語・ドイツ語）にも通じており、十分な実力を有していると判断できた。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： ソーシャルワークの「日本モデル」研究
－日本人の生活と文化に根ざした「生活場モデル」の構築－

氏名： 空閑 浩人

要旨：

本稿は、ソーシャルワーク実践やその方法の「日本流」の展開やかたちを描くこと、すなわちソーシャルワークの「日本モデル」の構築と発展を目指すものである。それは、諸外国に対して、日本のソーシャルワークの固有性のみをいたずらに主張するものでは決してない。ソーシャルワークの理論と実践を、日本なら日本というその国や地域に住む人々の生活に根ざしたものとする取り組みの一環としての、「日本モデル」研究という位置づけである。

ソーシャルワークは、人々が暮らす社会のなかで、日常的に営まれる生活現実を見据えて実践される社会福祉援助とその方法の体系をもち、生活者としての人間に迫るものでなければならない。改めて言うまでもなく、日本でのソーシャルワークの実践が対象とする多くは、日本で暮らしている日本の文化をもつ（たとえば、特別にアメリカ的な文化を持っていないような）日本人である。そうである以上、当然のことながら、日本で実践されるソーシャルワークに対しては、いかにそれが日本社会で暮らす日本人の生活現実根ざした社会福祉援助の営みとして、すなわち生活支援の実践や方法として機能し得るかが問われなければならない。そのためには、日本でのソーシャルワーク実践のなかで体験される様々な日本的な特徴に着目するとともに、既存のソーシャルワークの理論に対しては、現場における実践との連動という観点からとらえ直していく作業が必要である。

ソーシャルワークの「日本モデル」とは、日本人の生活や文化に根ざした生活支援の実践とその実践を担うソーシャルワーカーの経験を大切に、日本流のソーシャルワークのあり方を示すものである。それは、何よりも今日の日本社会のなかで、様々な生きづらさや生活のしづらさを抱える人々に対する、確かな生活支援としてのソーシャルワークを支える「知」の創造を目指すものである。

本稿は、大きく以下のような構成となっている。

- 序章：ソーシャルワークの「日本モデル」とは何か
- 第1部：「社会福祉援助」としてのソーシャルワークの基盤
- 第2部：日本人の生活・文化と「生活場モデル」の構想
- 第3部：「日本モデル」としての「生活場モデル」の展開
- 終章：ソーシャルワークの「日本モデル」の発展と成熟

まず序章では、「日本モデル」の必要性とその構築に向けての課題について述べている。ソーシャルワークの「日本モデル」とは、言うまでもなく、日本の社会で暮らす日本人に寄り添い、その生活現実根ざして実践される生活支援のかたちである。そのような「日本モデル」は、日本人の日常生活を見つめること、そしてその人々と生活現実にかかわるソーシャルワークの実践を見つめ直すことによって見出されるものである。そして、そのためには、日本人がもつ文化を明らかにするとともに、ソーシャルワークを検討する際の前提となる「準拠枠」そのものを問い直すことが必要になることを指摘した。

続いて、第1部から第3部までを通して、大きく3つの観点から、ソーシャルワークの「日本モデル」について論じている。各部で検討される課題を一言で言えば、第1部は「『日本モデル』の必要性」、第2部は「日本モデルとしての『生活場モデル』の提示」、第3部は「『生活場モデル』の実証的考察」ということになる。

第1部は、「日本モデル」に関する議論の前提として、そもそもなぜソーシャルワークに「日本モデル」が必要なのかということについて述べた箇所である。ソーシャルワークが、社会福祉の様々な分野あるいは医療その他の隣接領域において、人々の生活を支援するための「社会福祉援助」の方法や実践であることをふまえ、そもそもソーシャルワークをソーシャルワークとして成り立たせるものは何かということ、言わば、「人とその生活にかかわる援助の営みがソーシャルワークであるということの基盤となるもの（人間観、生活観、援助観）」についての問い直しを行った。具体的には、ソーシャルワークが「ライフ（life）」としての人間の「生」の現実にかかわるものであるということから、ソーシャルワークにおける「かかわり」の意味や「ソーシャル」という言葉、さらに生活とその主体である個人への視点に関する検討を行った。改めて「ソーシャルワークとは何か」という本質的な問いに立ち返っての考察を行うことにより、「日本モデル」の必要性を主張した。

第2部では、日本人の生活や文化に根ざしたソーシャルワークのあり方、つまりソーシャルワークの「日本モデル」としての「生活場モデル」を構想した。ソーシャルワークにおいては、様々な利用者とその現実の生活をいかに理解するかということが、援助の展開にあたり問われなければならない。そのようなソーシャルワークにおける生活への視点を追求するならば、その国や地域の人々の文化への理解は欠かせない。つまり、日本での実践のあり方を考えるならば、日本人の生活の中でのものの見方や考え方、価値観、行動様式といった「文化」を理解することが必要になる。また、そのような文化との関連でソーシャルワークを検討することは、日本人の現実の生活への理解と、その生活現実の中から出発するソーシャルワークの展開を可能にし、確かな生活支援の実践や方法として機能させるに至ると考える。具体的には、生活世界としての「世間」に生きる日本人とそのような日本人における「主体性」の現れ方について取り上げた。特に、今日のソーシャルワークにおいて、人間存在の形態を表す言葉として当たり前に使われている「個人」という概念に着目し、それが果たして「世間」に生きている日本人の、生活者としての現実存在を的確に意味しているのかという観点からの考察を行った。それらをふまえて、「場の文化」とされる日本人の文化に根ざしたソーシャルワークのあり方として、「生活場モデル（Life Field Model）」を提示した。

第3部では、第2部で示した「生活場モデル」について、日本の社会福祉現場で働くソーシャルワーカー自身によって記された、あるいは語られた言葉から、実証的な考察を行った。それらの言葉は、たとえばソーシャルワークの「テキスト」とされるような書物に書かれているような既存の言葉ではなく、ソーシャルワーカーが自らの実践や仕事を言語化した「生の言葉」である。そのような言葉に丁寧に寄り添うことによって、ソーシャルワークの実際に照らしながら、日本のソーシャルワークとしての「生活場モデル」を検証していく作業を行った。「生活場モデル」がソーシャルワークの日本モデルとして浸透し、機能していくためには、日本のソーシャルワークの実践現場のリアリティおよび実践を担うソーシャルワーカーの経験や思考に照らした検討が必要である。ここでは、医療現場で働くソーシャルワーカーによって言語化されたクライアントの「生活へのアプローチ」、さらに高齢者福祉施設の職員によって言語化された「家族へのアプローチ」に関する検討を通して、日本のソーシャルワークとしての「生活場モデル」の展開を描いた。それは、日本人とその日常生活が、様々な「場」（家庭や地域その他の生活の場所、生活環境、生活状況、人間関係や社会関係、参加の機会など）に支えられているということ、生活主体としての個人は「居場所」があることで成立し、支えられるということを中心とする生活支援のあり方である。

すなわち「生活場モデル」とは、日本人の生活と文化へのまなざしと、日本人が行動主体や生活主体として成立する「場」への視点、言わば日本人の生活を支える「生活場 (Life Field)」への視点とアプローチを基盤に据えて、このような「生活場」の維持や構築、充実を目的とした「日本モデル」としてのソーシャルワークの理論と実践の構想である。それは、「場」が持つ力に働きかけながら、人とその暮らしを支える生活の「場」を、利用者とともに協働で見出していく、「共創の場づくり」としてのソーシャルワークの営みである。

本稿全体のまとめとなる終章では、日本の「国籍」や「故郷」をもったソーシャルワークの実践や研究として、「生活場モデル」の可能性を含めた「日本モデル」の発展と成熟に向けての課題を提示した。ソーシャルワークの「日本モデル」とは、日本で暮らす人々への確かな生活支援を可能にする理論と実践のあり方として、日本社会と日本人の生活に眼差しを据え、ソーシャルワーカーの実践経験の言語化を通して、その発展と成熟を目指していくものである。すなわち、日本社会における様々な生活問題に向き合うソーシャルワークの実践を支える、日本流のソーシャルワークの知と実践の創造と蓄積であり、様々な利用者とその生活に寄り添うソーシャルワークの実践とその過程を支える「共通の土台」を示すものである。さらに、この「日本モデル」は、決してアメリカや諸外国の理論や実践と対立する、あるいはそれらを排除するようなソーシャルワーク・モデルではない。ソーシャルワークがそれぞれの国や地域のなかで、その社会状況や人々の暮らしに根ざした独自性を持って機能していくための取り組みであり、その意味で、ソーシャルワークの国際的な普遍性を見出していくうえでも意義あるものと考えられる。